

英語学習者の個人的要因に関する一考察

小嶋 英夫

Characteristics of Individual EFL Learners

Hideo KOJIMA

(2002年11月30日受理)

Learners are the key participants in curriculum development projects and it is essential to collect as much information as possible about them before a project begins. This paper aims to examine the characteristics of individual EFL (English as a Foreign Language) learners in the 2nd and 3rd years at Akita National College of Technology. A questionnaire was implemented to investigate the individual learners' personality factors, such as learning preferences, self-esteem versus anxiety, extroversion versus introversion, motivation, learning styles and strategies. As a result, a variety of characteristics were recognized. The students had positive attitudes toward communication-oriented EFL learning and teaching, although they lacked confidence in their English abilities. In a learning-centered approach to EFL education, the students should be encouraged to develop learner autonomy and pragmatic communicative competence in English.

1. はじめに

外国語または第2言語としての英語教授法 (TEFL/TESL) の研究分野が成立して以来、2つの領域、つまり言語習得過程の本質の解明と学習者に内在する要因の研究のうち、初期の段階では前者が強調されてきたが、1980年代の終わり頃から、後者である学習者の情意要因 (affective factor) と認知要因 (cognitive factor) に注目した研究が盛んになってきている。秋田高専の英語教育においても、学生の個人的な特徴とコミュニケーション活動との関わりがこれまで以上に気になりつつある。言語学習に影響を及ぼすと思われる学習者の個人的要因を解明することは、今後学習者を主体に据えた高専型の新しいアプローチを開発する上で、重要なプロセスとなることは言うまでもない。情意面と認知面のバランスが大切であるとする基本的認識に立ち、全学科全クラスの学生を対象に英語に関する意識調査を実施してみた。本研究では、平成13年度に始まった英語教育改善プロジェクトの主な対象学年である第2学年と第3学年のデータを全体から抽出し、両者を比較分析しながら今後の指導の在り方を考察する。

2. 秋田高専における調査の目的と背景

21世紀における新しい地球社会の担い手たちの「時代を生きる力としての実践的英語コミュニケーション能力」の育成が、5年間一貫教育を特徴とする高専の英語教育においてもこれまで以上に強く求められている。英語教育者は、実践的コミュニケーション能力の養成が時代の流れであることを踏まえながら、教育現場での様々な課題に対応できるバランスのとれた見識と指導力を要求される。秋田高専においては、国際的センスを備えた技術者として将来世界を舞台に活躍を期待される学生たちが、時代の要請に応える国際コミュニケーションの基礎能力をより主体的・自律的に身につけることができるように、日常の教育内容・方法を意識的に改善する必要がある。このような現状を考慮して、秋田高専の英語教育改善プロジェクトでは、英語学習における4技能 (リスニング・スピーキング・リーディング・ライティング) を統合的に組み入れた高専型の新しいコミュニケーション・アプローチを考案・実践しながら、学生たちの実践的英語コミュニケーション能力を学年進行で育成することを目指している。

英語教育改善プロジェクトの初年度としては、第

2 学年に対する実用英検 (STEP) 準 2 級レベル相当の学力充実への取り組み, また第 3 学年対象の TOEIC への取り組みが大きな特色である。そこで, 英語学習における個人的要因の観点から, 2・3 年生たちの実態を探る必要が生じた。今回の調査・分析が, 本校の英語教育改善への一助となるのみならず, 日本の新しい英語教育を考える好機になることを期待するものである。

リサーチ・クエスチョンは次の 3 点である。

- 1) 秋田高専生は英語学習に関してどのような個人的要因を持っているか。
- 2) 秋田高専生はどのような英語学習・教授法を期待しているか。
- 3) 秋田高専生はラーナー・オートノミー (学習者の自律性) をどのように認識しているか。

3. 調査の手順

平常の英語授業で実用英検準 2 級指導対象の第 2 学年生 148 名, TOEIC 指導対象の第 3 学年生 154 名に対して, 平成 14 年 7 月中旬に無記名回答で意識調査を実施した。学習者要因の研究では比較的採用される頻度の高い質問紙調査法に決め, 調査目的に合うように独自の質問用紙を作成し, 5 段階評価とした。質問項目の構成群としては, (1) 学習の好み (learning preferences) (2) 自信対不安感 (self-esteem and anxiety) (3) 外向性対内向性 (extroversion and introversion) (4) 動機づけ (motivation) (5) 学習スタイルとストラテジー (learning styles and strategies) となっている。

各構成群は以下の通りである (資料参照)。

(1) 学習の好み

項目 1: 学校の教科の中で英語を好きである。

- 2: 英語に対して興味・関心があるのもっと力を入れて学びたいと思う。
- 11: 英語の家庭学習を自分なりによくやっていると思う。
- 15: 自分自身の生活や興味に関する話題について英語で自己表現できるようになりたいと思う。
- 16: できるだけ英語らしい発音や表現を心がけたいと思う。
- 22: 自分の英語学習に責任を持ち自律的に計画し持続できる力を身につけたいと思う。
- 23: 英語で話したり聞いたりする力をもっと伸ばしたいと思う。
- 24: 英語で読んだり書いたりする力をもっと伸ばしたいと思う。

27: 英語の新しい語彙や表現を実際の場面で使ってみたいと思う。

28: 他の人が英語でのコミュニケーションを楽しんでいるのを見ると自分も実践的な英語力をもっと磨きたいと思う。

29: 学校での英語授業のみならず学外でのいろいろな機会を利用してコミュニケーション能力を身につけたいと思う。

(2) 自信対不安感

12: 自分の英語力について不安よりも自信をより強く感じる。

(3) 外向性対内向性

13: 英語の授業では自発的に英語で質問や発表をしようと思う。

14: 英語を除くその他の授業については積極的に日本語で質問や発表をしようと思う。

(4) 動機づけ

3: 学校のテストやその他の試験のために英語を学びたいと思う。

4: 将来の自分の仕事に役立つように英語を学びたいと思う。

5: 外国の書物や芸術などを直接理解できるように英語を学びたいと思う。

6: 世界の人々と交流できるように英語を学びたいと思う。

7: 時代を生きる一人の人間として成長できるように英語を学びたいと思う。

8: 英語圏の文化や社会などを理解できるように英語を学びたいと思う。

9: 外国を訪問し快適に生活できるように英語を学びたいと思う。

10: ネイティブ・スピーカーとコミュニケーション活動をすることができるように英語を学びたいと思う。

(5) 学習スタイルとストラテジー

17: 英語の授業形態は教師主導型よりも学生の主体性・自律性をより重んじる学習者中心型がよいと思う。

18: 英語授業での成績評価は定期試験, 授業態度, 提出課題などを総合的に考慮するべきであると思う。

19: 英語の学習評価は先生だけではなく学習者本人, 学習者同士の評価も考慮するべきであると思う。

20: 英語の授業ではテープ, ビデオ, パソコンなどを利用した教材を使って学びたいと思う。

21: 個人学習のみならずグループで協同学習するのも楽しいし効果的であると思う。

英語学習者の個人的要因に関する一考察

- 25: 英語でのコミュニケーション活動では誤りや失敗を気にせずむしろそれらを生かして学びたいと思う。
 26: 英語の語句や言い回しがわからない時は他のことば表現やジェスチャーで補いたいと思う。
 30: 実用英検, TOEICなどの資格試験の機会を大いに活用したいと思う。
- (from Willing, K. 1988. "Learning Styles in Adult Migrant Education." In Richards, J. C. and L. Lockhart. 1994. *Reflective Teaching in Second Language Classrooms*. Cambridge: Cambridge University Press; Brown, H. D. 2002. *Strategies for Success: A Practical Guide to Learning English*. New York: Longman)

4. 結果と考察

表1 英語学習者の個人的要因に関する2・3学年比較

2年生: 148名 3年生: 154名

(注) 集計の数字は各学年毎の調査総数における回答数の%である。

質問項目	全く賛成 (%)		ほぼ賛成 (%)		どちらでもない (%)		ほぼ反対 (%)		全く反対 (%)	
	2年	3年	2年	3年	2年	3年	2年	3年	2年	3年
1	5.0	5.0	18.8	17.6	36.4	29.7	24.0	24.3	15.6	23.0
2	6.0	16.2	28.6	30.4	45.5	29.7	13.6	16.9	6.0	7.0
3	8.0	13.5	26.6	31.1	35.1	27.0	16.9	17.6	10.8	10.8
4	26.8	32.9	35.4	40.9	24.2	18.8	6.0	5.0	8.0	2.0
5	17.6	25.7	28.8	32.4	35.3	23.6	10.5	10.1	8.0	8.0
6	30.1	32.4	30.5	35.8	30.5	22.3	4.0	7.0	5.0	3.0
7	10.4	12.2	24.0	23.0	47.4	46.6	10.4	12.2	8.0	6.0
8	11.0	18.9	28.6	28.4	42.9	32.4	12.3	15.5	5.0	5.0
9	28.0	34.5	29.9	31.8	23.4	21.6	11.7	7.0	7.0	5.0
10	7.0	9.0	13.0	13.5	48.1	35.8	14.9	23.6	16.9	17.6
11	4.0	2.0	7.3	8.0	27.3	17.6	32.0	27.5	29.3	44.4
12	0.6	2.9	1.9	3.6	22.7	14.4	31.2	20.1	43.5	59.0
13	0.6	2.7	2.6	3.4	29.9	21.6	36.4	33.1	30.5	39.2
14	7.1	8.7	11.7	33.6	48.1	33.6	22.7	25.5	10.4	24.2
15	14.9	20.4	34.4	28.6	33.8	24.5	10.4	14.3	6.5	12.2
16	24.0	27.8	40.9	39.2	28.6	22.3	3.9	8.8	2.6	2.0
17	23.5	19.6	15.0	16.9	51.0	49.3	6.5	7.4	3.9	6.8
18	36.4	32.4	27.3	28.4	28.6	28.4	1.9	5.4	5.8	5.4
19	19.5	13.5	22.7	25.7	39.0	43.2	11.0	7.4	7.8	10.1
20	26.6	23.6	25.3	39.2	37.7	28.4	6.5	2.7	3.9	6.1
21	22.1	16.2	26.0	37.8	35.1	26.4	9.7	9.5	7.1	10.1
22	12.3	18.2	39.6	37.2	38.3	35.1	5.8	6.1	3.9	3.4
23	43.5	49.4	35.1	28.8	18.2	17.5	0.0	2.5	3.2	1.9
24	38.3	39.2	35.7	35.8	22.1	18.9	1.3	3.4	2.6	2.7
25	20.1	22.3	24.7	26.1	44.2	33.8	7.1	14.0	3.9	3.8
26	27.3	23.6	41.6	41.9	24.0	29.1	5.2	4.1	1.9	1.4
27	16.9	11.5	23.4	30.4	46.1	43.2	8.4	10.1	5.2	4.7
28	19.6	24.5	30.7	34.0	34.6	28.6	8.5	7.5	6.5	5.4
29	14.2	13.6	25.0	25.2	40.5	44.2	8.8	7.5	11.5	9.5
30	18.2	19.7	28.6	30.0	35.7	37.4	11.0	4.1	6.5	8.8

(1) 学習の好み

英語学習において個々の学習者が持っている基本的な好みの傾向を探ってみた。調査項目1の結果からすれば、教科として英語を好む学生は、2・3学年共に23%前後と少ない。これは高専生の入学以来の一般的な傾向と思われる。

一方、「英語に対して興味・関心があるのでもっと力を入れて学びたい」学生は予想以上に多く、3年が2年を凌いで46.6%と高い。さらに、項目23・24からして自己のコミュニケーション能力に自信をつけたい学生が多いのも自然である。「英語で話したり聞いたりする力を伸ばしたい」学生(2年78.6%, 3年78.2%)が、「英語で読んだり書いたりする力を伸ばしたい」学生(2年74.0%, 3年75.0%)をやや上回るが、後者も高専生にとっては重要な英語能力として認識されていることが認められる。項目16の「できるだけ英語らしい発音や表現を心がけたい」学生の割合も高い(2年64.9%, 3年67.0%)。項目15は英語で自己表現ができるようになりたい学生が2・3年共に50%近くいることを示し、項目28では他人から刺激を受けると自分も実践的な英語力を磨きたくなる学生が50%を越えている(2年50.3%, 3年58.5%)。

これらに反して、学外の機会を利用してコミュニケーション能力を伸ばそうとする積極型の学生が少ない(2年39.2%, 3年38.8%)のは残念である。学生たちは、「英語学習に責任を持ち自律的に計画し持続できる力を身につけたい」(2年51.9%, 3年55.4%)としながらも、項目11で家庭学習を大いに欠いている(2年61.3%, 3年71.9%)現実が明らかである。英語に対する自信をつけるために不可欠な自律的言語学習の継続を実現させたい。

(2) 自信対不安感

自信とは、Coopersmith(1967)によれば、個人が自分自身に対して抱き習慣的に保持している評価である。是認・非難の態度を表すものであり、個人自身がどの程度まで能力があり、成功でき、価値があると信じているかを示すものとされる。自信の3段階、つまり第1「包括的自信」、第2「特殊的自信」、第3「課題自信」の中で、第1段階が多くの状況における自己価値に対する包括的評価、第2段階が外国語習得全般そして第3段階が外国語習得の特別な面、例えばリスニング、スピーキングなどに関する自己評価になる(Brown 2000:145-146)。大きな自信が成功をもたらし、逆に成功が自信をもたらすという相互交渉的な関係になっていることにも留意し

たい。

一方不安感とは、落ち着きのなさ、自己疑問、懸念、心配、といった感情と結びついている。指導者としては、学生の不安が深層の包括的レベルの習性(trait)不安感か、一時の状況的レベルの状態(state)不安感かを見極めなければならない。消耗的(debilitative)不安感に対する促進的(facilitative)不安感とは、学習の成功への鍵となる可能性があることも大切である(Brown 2000:151-152)。欧米の学生に比べて、日本人学生のコミュニケーション不安度は高いと想像されるが、本校の場合も項目12からすれば、かなりの学生(2年74.7%, 3年79.1%)が学力への不安を強く感じている。とは言うものの、項目28は他人への競争心が促進的に作用していることを暗示していて興味深い。

(3) 外向性対内向性

外向性とは、自我の高揚や自信、一人の独立した人格の自覚などを、自分ではなく他人に判断してもらいたいという欲求の度合いである。逆に内向性は、それらを他人から認めてもらうのではなく、自分から引き出す度合いのことである(Brown 2000:155)。外向性と内向性が英語の学習を促進するか阻害するかは明らかではないようだが、お互いに直面してインタラクションを行うオーラル・コミュニケーション場面では、やはり外向性は有利に作用すると思われる。学生の自発的発表能力の欠如は、日本の教育の弱点と見なされるが、文化的基準の違い、個人における外向性と内向性の程度差にも配慮する必要がある。内向的な学生には内面的・精神的な強さがあり、学力的にむしろ高いこともまれではない。

項目13・14のデータからして、自発的に質問・発表しようとする学生割合は、英語(2年66.9%, 3年72.3%)、日本語(2年33.1%, 3年49.7%)といずれも高い。欧米の教室では全く逆の結果になることを筆者自身体験しているが、日本人学生のコミュニケーション能力の向上は全ての授業で検討されるべきである。英語について2年生より3年生の自発性が低いのは、学年毎に読み書きの知識重視が強まること、2学年に組み込まれる外国人講師担当の英会話クラスが3学年ではなくなり、英語コミュニケーション活動の持続の面で弱点があることなどが原因とされる。

(4) 動機づけ

動機づけは、人のある特別な行動へと動かす内的な推進力、衝動、感情、願望と考えられている。

Ausubel (1968) によると、人間の持つ6つのニーズが動機づけの枠組みを与えている。つまり、「探求」、「操作」、「行動」、「刺激」、「知識」、「自我高揚」の要求である。これらはほとんどの要求の本質を含み、外国語習得にとりわけ関係が深い。動機づけを強めたり弱めたりする多くの教育的・個人的・社会的な要因もあろうし、内面的・外面的動機づけの関係も人間心理の基本的な特質となるであろう。

項目3・4・5は道具的動機づけを、項目6・7・8・9は総合的動機づけを意味している。総じて、前者は2年生が34.4%~60.6%、3年生が35.2%~68.2%の高い結果を示している。特に大学入試のない高専生としては、項目3よりも項目4の道具的動機づけが注目される。国際的なセンスを身につけ地球社会で活躍する仕事に就くことを希望する者が多いからだろうか。また、総合的動機づけについては、項目7・8よりもより実践的な項目6・9の方が強い動機づけとして影響していることが推察できる。項目10でネイティブ・スピーカーとの英語コミュニケーションが苦手(2年31.8%、3年41.2%)としながらも、項目6・9では、異文化コミュニケーションのために英語を習得したい学生が2年で60%前後、3年で65%以上いることは注目に値する。

(5) 学習スタイルとストラテジー

学生の期待する英語授業の形態、評価、教材はどうかであろうか。項目17からは、教師主導の授業を望むのは2学年で10.4%、3学年で14.2%と予想よりも低いことが認められる。どちらでもない学生が半数いるにしても、伝統的な高専の授業スタイルも徐々にその形態を変える必要が出てきている。項目21の「個人学習のみならずグループで協同学習をするのも楽しいし効果的である」とする学生は、2年生48.1%、3年生54.0%と半数前後いる。グループ学習は一見日本人学生に馴染み易いと思われるが、実際よく観察すれば協同学習 (Cooperative Learning) の基本要素と見なされる individual accountability, face-to-face promotive interaction, social skills, group processing (Johnson and Johnson 1999) などが備わっているかは大いに怪しい。学習者の自律性を育てることを目的とする立場から、協同学習の有効性を探求するのも意義あることであろう。

次に、学生にとって成績は大いに気になるものだが、「成績評価は定期試験、授業態度、提出課題などを総合的に考慮すべき」と考える学生は、両学年とも60%を越える。それも「先生のみならず学習

者本人や学習者同士の評価も考慮すべき」という考えに反対する学生は両学年とも18%前後にすぎない。学生による自己評価や相互評価は、学習者中心型の教授法で登場した新しい方法であり、本校での応用について今後検討を要する。

教材については、ビデオやパソコン、それにコンピュータ教材を使いたい学生が2学年(51.9%)よりも3学年(62.8%)に多い。3年生が週2時間LL教室を使う機会があるのに2年生にはないこと、また一般に3年生の方がコンピュータに触れる機会が多いことからくるのであろうか。われわれ指導者は、高専の教育的コンテキストを最大限に活用してより効果的な教材開発を持続することが重要であろう。

ところで、優れたEFL/ESLの学生は少しくらい「賭をする」ことができ、言語に関する直感や勘を進んで働かせたり間違いを犯すような冒険をすることを特徴としている (Brown 2000:149)。高い包括的自信のある者は、間違っても笑われることを恐れない。指導者は彼らの勇ましい行為を褒めてやることこそ必要ではなかろうか。項目25は、学生のおよそ半数近く(2年44.8%、3年48.4%)が「英語でのコミュニケーション活動で誤りや失敗を気にせずむしろそれらを生かして学びたい」と思っていることを示している。項目26から、英語の語句や言い回しがわからない時、コミュニケーション・ストラテジーを使おうとする学生が意外に多い(2年68.9%、3年65.5%)のも、ネイティブとのコミュニケーション体験などで、間違いを寛容的に許され、わからなくても他のことば表現やジェスチャーで補えることを実感しているせいであろうか。

最後に、この調査を実施した7月時点で、項目30の「実用英検、TOEICなどの資格試験の機会を大いに活用したい」とする割合が50%近いのは好ましいが、反対とする2年生17.5%、3年生12.9%がその後どのように対応していけるかが問われるであろう。

5. まとめと今後の課題

本研究では、秋田高専における英語学習者の個人的要因に関して、2・3学年に絞って調査結果を分析・考察してきた。日頃の英語授業の内容・方法を地球時代により相応しいものに改善・発展させる際に、学生一人一人の学習目的、習熟度、学習スタイルなどが異なることを理解し、本人が自らの英語学習をどのように意識しているか、日々の授業に対してどのような考えを抱いているか、などを問いか

る意識調査を実施することの意義は大きい。実態の分析から得られる様々な情報が、現実的に学習主体である学生のニーズに適った授業内容・方法を構想する上で大いに役立つからである。

リサーチ・クエスチョンの観点に基づいて分析結果をまとめると次のようになる。

- 1) 秋田高専生は英語学習に関してどのような個人的要因を持っているか。
 - 教科として英語を好む学生は2・3学年共に少ないが、もっと力を入れて英語を学ぶ必要性を感じている学生数は、3年が2年を凌いで半数に近づいている。
 - 現在の自分の英語力に自信を欠いている学生は両学年共に70%を優に超えるが、4技能において英語コミュニケーション能力を伸ばしたい学生が共に70%台、英語らしい発音・表現を心がけたい学生が共に約65%と多い。
 - 英語のみならずその他の授業においても、自発的な発表意欲を欠いている学生が多い。
 - より実践的な動機づけを持っており、将来の仕事に役立つように、また世界の人々と交流できるように英語を学ぶ学生が多い。
- 2) 秋田高専生はどのような英語学習・教授法を期待しているか。
 - 教師主導型で知識を教え込む授業形態よりも学生の主体性・自律性を重んじる学習者中心型を望む学生が増えている。
 - 個人学習のみならずグループを生かした協同学習も効果的であると考える学生が両学年で約50%いる。
 - 定期試験、授業態度、提出課題などを総合的に評価してほしい学生が両学年で60%以上、また学生の自己評価、相互評価を採用してほしいと考える学生が共に約40%いる。
 - テープ、ビデオ、コンピュータなどを生かした教材を希望する学生が2学年で約50%、3学年で約60%いる。
- 3) 秋田高専生はラーナー・オートノミー（学習者の自律性）をどのように認識しているか。
 - 自分の英語学習に責任を持ち自律的に計画し持続できる力を身につけたい学生は2・3学年共に50%を越えるが、一方で共に60%以上の学生が家庭学習不足を感じており、自律的学習が教室内外で習慣化されていない。
 - 外部資格検定試験を大いに活用したい学生が2・3学年共に約50%おり、自律的学習の成果を問われる機会が多くなってきている。

以上から、今後は学習者の目的意識と人間性を生かした指導で彼らの自信の高揚を促す必要がある。そのためには、授業へのアプローチを伝統的な教授中心型（teaching-centered）から学習中心型（learning-centered）へと転換することが学校全体で求められていると思われる。学習中心型のアプローチは、教授中心型とは教育的発想が大きく異なり、学習者のニーズ、動機、学習スタイル、学習ストラテジーなどを考慮しながら、彼らの潜在能力の開発が図られる。その際、学習者自身が教室内外での学習内容・方法についてできるだけ関与する機会を与えられることにより、自律的な責任ある学習者へと成長することを奨励される。その成長がより高次元で達成できるように、学習の促進者となる指導者の役割がこれまで以上に重要なカギを握ることになる。学習結果のみならず多様なタスクに取り組む学習プロセスの評価も継続的に実施されなければならない。

今回は2・3学年に絞って分析したが、他の学年の反応も当然考慮されるべきであるし、2・3年生が4・5年生になる時どのような英語学習者として成長を遂げているか、今後の追跡調査も必要とされるであろう。さらには、本校の教官を対象に、秋田高専においてはどのような英語能力の育成を目標にするべきか、一般英語と専門英語の指導はどうあるべきか、外部検定・マルチメディア・外国人講師の活用をどう考えるか、学習中心・自律的学習といったコンセプトを本校の授業でどのように推進できるか、今後の英語教育改善の核になる事項を問いかける調査を実施して、寄せられた意見・アドバイスをプロジェクトの発展のために生かすことも不可欠であろう。最近小学校から大学までの一貫制の英語教育が話題になっているが、秋田高専としては5年間一貫教育に専攻科を加えた7年間教育のメリットを再評価し、現場教育の効果を最大限に生かす時が来ていると思われる。

参考文献

- Ausubel, D. A. 1968. *Educational Psychology: A Cognitive View*. New York: Holt, Rinehart and Winston.
- Brown, H. D. 2000. *Principles of Language Learning and Teaching*. New York: Longman.
- Coopersmith, S. 1967. *The Antecedents of Self-Esteem*. San Francisco: W. H. Freeman.
- Johnson, D. W. and R. T. Johnson. 1999. "What Makes Cooperative Learning Work." In D.

英語学習者の個人的要因に関する一考察

Kluge, S. McGuire, D. Johnson, and R. Johnson (Eds.), *JALT applied materials: Cooperative Learning*. Tokyo: Japan Association for Language Teaching.
 Hideo, K. 2002. "Promoting Autonomous EFL Learning through Cooperative Group Work." 国立高等専門学校協会 論文集「高専教育」第25号pp.187-192.

資料

英語に関する調査

()年 ()組 性別(男・女)

次の1)~30)の質問はあなたの英語学習に対する気持ちをたずねるものです。例にならなくてもよく当てはまる番号に○印をつけてください。あまり深く考え込まず普段のあなたについてありのまま答えてください。

(記入例) テレビは自分の生活にとってなくてはならないものである。

5 : 全く賛成 4 : ほぼ賛成 3 : どちらでもない
 2 : ほぼ反対 ① : 全く反対

- 項目 1 : 学校の教科の中で英語を好きである。 5 4 3 2 1
- 2 : 英語に対して興味・関心があるのもっと力を入れて学びたいと思う。 5 4 3 2 1
- 3 : 学校のテストやその他の試験のために英語を学びたいと思う。 5 4 3 2 1
- 4 : 将来の自分の仕事に役立つように英語を学びたいと思う。 5 4 3 2 1
- 5 : 外国の書物や芸術などを直接理解できるように英語を学びたいと思う。 5 4 3 2 1
- 6 : 世界の人々と交流できるように英語を学びたいと思う。 5 4 3 2 1
- 7 : 時代を生きる一人の人間として成長できるように英語を学びたいと思う。 5 4 3 2 1
- 8 : 英語圏の文化や社会などを理解できるように英語

- を学びたいと思う。 5 4 3 2 1
- 9 : 外国を訪問し快適に生活できるように英語を学びたいと思う。 5 4 3 2 1
- 10 : ネイティブ・スピーカーと英語でコミュニケーション活動をするように英語を学びたいと思う。 5 4 3 2 1
- 11 : 英語の家庭学習を自分なりによくやっていると思う。 5 4 3 2 1
- 12 : 自分の英語力について不安よりも自信をより強く感じる。 5 4 3 2 1
- 13 : 英語の授業では自発的に英語で質問や発表をしようと思う。 5 4 3 2 1
- 14 : 英語を除くその他の授業については積極的に日本語で質問や発表をしようと思う。 5 4 3 2 1
- 15 : 自分自身の生活や興味に関する話題について英語で自己表現できるようになりたいと思う。 5 4 3 2 1
- 16 : できるだけ英語らしい発音や表現を心がけたいと思う。 5 4 3 2 1
- 17 : 英語の授業形態は教師主導型よりも学生の主体性・自律性をより重んじる学習者中心型がよいと思う。 5 4 3 2 1
- 18 : 英語授業での成績評価は定期試験、授業態度、提出課題などを総合的に考慮するべきであると思う。 5 4 3 2 1
- 19 : 英語の学習評価は先生だけではなく学習者本人、学習者同士の評価も考慮するべきであると思う。 5 4 3 2 1
- 20 : 英語の授業ではテープ、ビデオ、パソコンなどを利用した教材を使って学びたいと思う。 5 4 3 2 1
- 21 : 個人学習のみならずグループで協同学習するの

- も楽しいし効果的である
と思う。
- 22：自分の英語学習に責任を 5 4 3 2 1
持ち自律的に計画し持続
できる力を身につけたい
と思う。
- 23：英語で話したり聞いたり 5 4 3 2 1
する力をもっと伸ばした
いと思う。
- 24：英語で読んだり書いたり 5 4 3 2 1
する力をもっと伸ばした
いと思う。
- 25：英語でのコミュニケーション 5 4 3 2 1
活動では誤りや失
敗を気にせずむしろそれ
らを生かして学びたいと
思う。
- 26：英語の語句や言い回しが 5 4 3 2 1
わからない時は他のこと
- ば表現やジェスチャーで
補いたいと思う。
- 27：英語の新しい語彙や表現 5 4 3 2 1
を学んだら実際の場面で
使ってみたいと思う。
- 28：他の人が英語でのコミュ 5 4 3 2 1
ニケーションを楽しんで
いるのを見ると自分も実
践的な英語力をもっと磨
きたいと思う。
- 29：学校での英語授業のみな 5 4 3 2 1
らず学外でのいろいろな
機会を利用してコミュニ
ケーション能力を身につ
けたいと思う。
- 30：実用英検，TOEIC など 5 4 3 2 1
の資格試験の機会を大い
に活用したいと思う。